布川文庫『大屋出版圖書目錄』―「八犬伝」受容の側面から―

山本貴恵

一、大川屋書店について

『大屋出版圖書目錄』について紹介したい。

大川屋書店発行の図書目録である。国会図書館所蔵本[VG1-H817]であり(1)、後述するが、「布川文庫」コレクションのうちの一冊である。資料の詳しい紹介をするその前に、まずは出版元である大川書店について説明しておきたい。

大川屋書店に関する先行研究としては、吉沢英明(2)、小田光男(3)、山本貴恵(4)がある。「八犬伝」受容史研究を行う上で、大川屋書店の『八犬伝』を研究するその意義は大きいといえる。なぜなら、明治期において大川屋書店の果たしたその役割は非常に大きかったからである。拙論【資料紹介】袖珍本『南總里見八犬傳』略解題」でも大川屋書店について紹介したが(5)、再度、大川屋書店についての概要を説明しておく。

八木敏夫編『全国出版物卸商業協同組合 三十年の歩み』の中で「大川屋の活躍」と題する一ページがある(6)。それによると、初代大川錠吉は深川で貸本屋を営んだ後、一八七〇(明治三)年に浅草前にて出版業を開業。その後、「たまたま講談の活字化を計ったのが図に当たり」、一世を風び(ママ)した菊判講談本時代の実現」をしたという。

二代目錠吉が婿入りした際には、「大川屋にはすでに七～八百種の出版物があ」り、「当時卸店はもちろん、露天商、高町商人、各地の小売書店では、大川屋の出版物を扱わないと商売にならな」かったそうである。大川屋は「信玄袋に見本を入れて、九州から北海道まで書店回りを行った」というから、全国津々浦々まで広く出回っていたと考えらえる。しかし、これほどの隆盛を誇った大川屋書店であるが、今現在、その存在は注目されることなく、すっかりと忘れ去られてしまっているようである。

拙論【資料紹介】大川屋書店版『里見八犬傳』略解題(7)」で紹介した資料は、ここで言う「一世を風び(ママ)した菊判講談本」である。

その本の奥書を見ると、一八九三（明治二六）年初版発行であるが、一九〇三（明治三六）年の時点で十版を発行しており、大分版を発行していた様子が見受けられる。そして貸本屋の所蔵本であった形跡があった。

その次の拙論「【資料紹介】袖珍本『南總里見八犬傳』略解題(8)」の中で紹介した袖珍本は、その貸本屋所蔵の菊判本の後印本であり、後に一世を風靡した立川文庫に先駆けて出された、「大川文庫」である。

つまり、両者を通して同じ本文を持つ作品が、一八九三（明治二六）年初版発行から一九一一（明治四四）年発行以降まで、明治の二十年間を通して多数発行され続けたわけである。両者はより多くの大衆を感化したであろう本の一つであったといえることは既に指摘している(9)。

このように広く大衆に親しまれた資料を研究することは、「八犬伝」受容史のみならず、近世文学の享受史、ひいては明治期における出版文化研究に寄与する一つの布石になるだろう。しかし現在、これほどまでに隆盛を誇った大川屋書店が忘れ去られてしまっている要因の一つとして、資料が散逸してしまっていることが大きいといえる。

本稿では、この全国津々浦々に影響を及ぼしていたであろう大川屋書店発行の『剛大出版圖書目錄』を紹介し、そこから見える新たな世界を垣間見たい。そのことによって、大川屋書店を巡る当時の状況、様相、そして「八犬伝」受容史からみた一端を解明していきたい。さらにはそのことによって、近世文学の享受史や明治の文化研究につながる一助としたい。

また、前述のごとく『剛大出版圖書目錄』は、国会図書館所蔵の「布川文庫」コレクションの中の一冊である。布川文庫は、布川角左衛門が収集した資料であり、近代出版史において重要な意味を持っているといえる。（「布川文庫」については三章で後述。）併せて出版文化史の中の「布川文庫」研究の一つの資料としても紹介及び考察していきたい。

二、『剛大出版圖書目錄』書誌

大川屋書店版『剛大出版圖書目錄』は前述の通り、国会図書館所蔵本[VG1-H817]である。

書誌を略述すると、縦15センチ、横9・9センチ。最終ノンブルは69である。全一冊、小型の小冊子である。出版年は記載されていない。葡萄茶色の紙装で綴じ穴が二つ。綴じは外れてしまっている。前表紙の上部には日の出のような絵が描かれている。

書題『剛大出版圖書目錄』は中心部に白抜きの字で書かれている。後表紙も白抜きの文字で、住所、書肆名、電話番号、振替口座が記載されている。表表紙、後表紙と一続きの紙であり、彫った字で書かれてある。著作権が不明であり且つ資料破損の為、当該資料の画像を掲載することはできない。そのため、一部分を引用して紹介したい。後表紙、奥付を示すと次頁のようである。

『大川屋出版圖書目錄』後表紙

東京市淺草區三好町七番地
書肆 大川屋 聚榮堂 大川錠吉
電話下谷千五百七十三番
振替貯金口座第四〇〇九番

『大川屋出版圖書目錄』奥付

發行所 聚榮堂 大川屋 大川錠吉
東京市淺草區三好町七番地
電話下谷 一五七三番
電信署號 ヲヲカハ

行印崎川　所刷印屋川大

奥付には、発行所、印刷所が大川屋であることが記されている。波線の枠の中に書かれており、線の四隅にはリボンのような図案が記されている。

冒頭の一ページ（ノンブルはなし）には、出版目録の概要が書かれている。引用すると次のようである。

『大川屋出版圖書目錄』冒頭一ページ

○大川屋出版目錄ノ實價ハ郵税共ニ有之候間右
御承知ノ上御注文ヲ乞フ但シ金高壹圓以下ハ
郵券代用ニテモヨロシ
○大川屋出版目錄ハ毎年一回改正ヲ行ヒ時々之
ヲ増補スベシ
○大川屋出版目錄御入用ノ御方ハ郵券一一錢ヲ御
送附相成候ハヾ直チニ御呈送可申候

以上より『大川屋出版圖書目錄』は、年一回改定し、発行していたようであること、そして金額は一一錢であったことが伺える。

全体の構成は、次のようになっている。（各ページは〔〕内に補記。）

『大川屋出版圖書目錄』全体の構成

概要

◎圖書類〔P．1－29〕

◎大坂五行 義太夫稽古本目録（上紙製）〔P．30－33〕

◎小説類〔P．34－63〕

都新聞探偵實話／探偵實話／涙香小説／探偵小説／圓朝傑作／大岡さばき／講談小説／講談百種／**戀愛・小説**／人情小説／人情と滑稽／滑稽と軍談／稗史小説

◎**小説類**〔P．64－65〕

◎御註文規定〔P．66－69〕

奥付

そのうち、八犬伝が記載されている箇所は、小説類の「戀愛・小説」〔P．58〕と、巻末の小説類〔P．64－65〕である。（**太字**で示した箇所。第四章にて後述。）

御註文規定〔P．66－69ページ〕は見開きで二ページあり、次のような構成となっている。

要旨／割引／送金〔P．66〕

郵券代用／代金引替小包郵便／遞送〔P．67〕

運送費／責任〔P．68－69〕

領収／御注意／事故〔P．69〕

この御注文規定に記載されている内容は、当時の大川屋及び明治期の代表的な書店の実情を示す、貴重な資料であるといえる。規定は奥付と同じ波線の枠に囲まれており、四隅にはリボンのような図案が描かれている。

以下、御註文規定の内容の一部分を引用する。ここでは、先に挙げた十一の項目のうち、要旨から代金引替小包郵便までを一部省略して記載する。

御註文規定

○要　旨　本書目記載の分は單に弊店出版物のみにて尚他版書籍類御入用の節は多少を論ぜず手廣く取次販賣仕候に付見積にて前金相添へ御註文次第可應貴需候

○割　引　本書目中の品一時に同品五部以上御入用の節は相當の割引を為すべ志　◎◎

○送　金　御注文の節は代金如何なる事情有之共前金御送附なき時は一切送本不仕候爲替は郵便爲替又は銀行送金券にて御送金有之度候（…　中略　…　）且又可相成は書留郵便にて御送金被下度候　◎◎◎

○郵券代用　爲替等に不便の地は郵券代用不苦候但志必ず一割増にて御送附の事且又切手封入の書状中往々切手紛失の恐れ有之候に付

可相成書留郵便にて御送附被下度候

○代金引替小包郵便　從來代金引替小包郵便にて御註文相應じ候處該代金拂込無之爲め差立郵便局より返却相成こと間々有之爲めに往復の郵便及手數料等は本店の損失と相成迷惑仕候間今後如何なる事情有之共代金引替小包郵便の御註文は必ず御註文品の價格三分の一以上御送金なくば應じ難く候尤も御送金なく御註文なる共一切御返信は致さず候間豫め左様御承知被下度候

◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎

この御註文規定から以下のことが伺える。

要旨からは、本目録は大川屋出版物のみであるが、大川屋が取次業も行っていたことが確認できる。また、割引欄からは目録中の品を一回に五部以上購入すれば、相当の割引があることが見られる。これは現在の書店でも通じることである。

送金欄にはいかなる事情があっても、前払いであることが書かれている。郵券代用の際には、一割増しであること、切手封入書状は紛失の恐れがあることから、なるべく書留にしてほしいことなどが記載されている。代金引換小包郵便欄には、本店の損失となるため迷惑であり、御注文品の価格三分の一以上を送金しなければ応じ難いこと、そして送金のない場合は、返信しないこと等が書かれている。

その他、いずれも価格についての注意事項には、「前金」や「一割増」といった語の隣に◎印を付すことでより分かりやすく注意を促している。

尚、ここには引用していないが、領収欄や事故欄、運送費欄には次のようなことが記載されている。領収欄からは、領収証が必要な場合は、送金時に別に三錢添える必要があることが伺える。事故欄には、もしご注文品が品切れの際は、出来期日を伝えること、また、当分できる見込みがない場合は、替品をご照会する旨が書かれている。即、返金といったわけではなかったようである。

また、運送費欄には、「東京市内ははがき又は電話にて御申越の節は早速持參可仕候」との一文がある。一章と重複するが、『全国出版物卸商業協同組合 三十年の歩み』の中の「大川屋の活躍」には、大川屋が「信玄袋に見本を入れて、九州から北海道まで書店回りを行った」ことを紹介したが、そのフットワークの軽さの一面を表しているといえる。

ここで、本目録が大体いつ頃以降に出版されたものか考察してみたい。この『剏出版圖書目錄』には、出版年が記載されていないため、大川錠吉が大川屋を浅草に開業した一八七〇（明治三）年以降であること以外は不明である。

ただ、御註文規定の運送費欄の料金表には、内地と臺灣、清國、韓國への小包郵便料金表が示されている。内地という呼称から、恐らく、韓國併合後の一九一〇（明治四三）年以降の出版物であるであろうことが推測される。

三、布川文庫コレクション

布川文庫とは、布川角左衛門（一九〇一〔明治三四〕-一九九六〔平成八〕年）が収集してきた約2万五千点の出版関係の資料群であり、現在は国立国会図書館のコレクションの一つとなっている[10]。

布川文庫コレクションの種類やその貴重性について書かれた先行研究は、柴野京子[11]、大久保久雄[12]がある。布川角左衛門のその生涯と業績について書かれたものとしては、小林恒也『出版のこころ―布川角左衛門の遺業[13]』がある。

布川角左衛門についての略歴を示せば、次のようである[14]。

新潟県生まれ。一九二八（昭和三）年に岩波書店に入店後、編集長、部長となる。退職後、ロックフェラー財団の招きにより、出版研究のため欧米諸国を訪問。帰国後には「布川出版研究室」を設立し、出版教育と出版研究、出版史資料の収集などを進める。

その後、一九六三（昭和三八）年には出版倫理協議会議長となり、出版倫理の向上に貢献。一九六六（昭和四一）年には『日本出版百年史年表』の編纂に編集長として携わる。一九六九（昭和四四）年には日本出版学会の創設に参加し、副会長、会長を務める。

一方、一九六九（昭和四四）年には、栗田出版販売代表取締役社長に就任、取締役会長、相談役を歴任。一九七九（昭和五四）年には、筑摩書房の管財人・代表取締役に就任。その後も、国立国会図書館納入出版物代償審議会議長、文部省著作権審議会委員、日本書籍出版協会相談役、読書推進運動競技会理事、図書券流通改善委員会委員長などを歴任。出版界や図書館界に多大な貢献をした人物である。

布川文庫は、一九八〇（昭和五五）年に国立国会図書館支部上野図書館へ仮寄託された。その経緯については、布川角左衛門「「布川文庫」の始末記」に、出版資料館の建設を構想したものの頓挫し、上野図書館に仮委託することになった経緯が書かれている[15]。また、柴野京子「出版資料としての布川文庫」は、日本出版学会による出版資料館の構想の背景について言及している[16]。

国立国会図書館月報に「特別コレクション「布川文庫」について」と題する一ページがある[17]。それによると、布川角左衛門と一九八七（昭和六二）年に正式な寄託契約を締結。当初は、その当時の支部上野図書館（現、国際子ども図書館）に「布川文庫室」を設け、出版関係者や研究者に限定で公開していたという。一九九八（平成十）年三月、支部上野図書館の改修工事に伴って、国立国会図書館の東京本館へ移送し、寄贈の手続きが行われた。二〇〇四（平成十六）年には特別コレクションに指定され、一般公開される運びになったという。

『出版圖書目錄』の表紙見返しの受付印には、「國立國會／10・5・20／圖書館藏書」とある。改修工事に伴い、三月に支部上野図書館から東京本館へ移管された後の五月に押印されたことが確認できる。

布川文庫コレクションの内容については、前出の布川角左衛門「「布川文庫」の始末記」にその大まかな種類が掲げられており、寄託するにあたって作成された目録によると、十四種類に分類できる

という[18]。以下、参考のために掲げておく。

(1) 出版文化・出版史・出版状況・出版事情および出版論に関するもの。
(2) 出版年鑑・出版目録・各種の図書目録に関するもの。
(3) 出版社史および出版人・出版関係団体に関するもの。
(4) 出版社・取次・書店など出版業とその業務に関するもの。
(5) 編集をはじめ装丁・レイアウト・校正など造本に関するもの。
(6) 印刷・用紙・製本など関連分野に関するもの。
(7) 著作者・読者・読書・図書館に関するもの。
(8) 書物・書誌・書誌学に関するもの。
(9) 検閲・出版取締・出版統制に関するもの。
(10) 言論出版の自由・出版倫理に関するもの。
(11) 著作権法・出版法をはじめ関係法制に関するもの。
(12) 新聞のほかジャーナリズム一般に関するもの。
(13) 広告・マスコミなどに関するもの。
(14) その他、特殊な出版物・特別の意味をもつ出版物に関するもの。

言うまでもなく、『㊟出版圖書目錄』は、(2)「出版年鑑・出版目録・各種の図書目録に関するもの」に該当する。ただし、戦前のものであり、読み捨てられていたであろう、大川屋書店の図書目録が、今も現存していることは、布川角左衛門の収集、保存による努力に他ならない。

布川角左衛門「「布川文庫」の始末記」には、神田の古書展で貴重な資料を発見した時のことが書かれているが[19]、本目録もそういった物の中の一つであったかもしれない。

四、「八犬伝」受容の側面から

『㊟出版圖書目錄』の「八犬伝」について考察していきたい。本目録中の「八犬伝」が記載されているのは二箇所、三点である。（第二章の『㊟出版圖書目錄』の全体の構成のうち、**太字**で示した箇所。）

二箇所とも小説類ではあるが、一点目がなぜ、「戀愛・小説」（P.58）の項目に入れられているのかが興味深いところである。同じく曲亭馬琴著の『夢想兵衛胡蝶物語』の次に記載されている。

書題は『南總里見八犬傳』で一冊物、三十錢と記載されている。

○夢想兵衛胡蝶物語　曲亭馬琴著　●二　十　錢
○南總里見八犬傳　同　一冊物　●三　十　錢

その他、桃水著『由縁源氏』（二十錢）や、春の屋おぼろ著『當世書生氣質』（四十錢）がある。『南總里見八犬傳』のみ、一冊物と書かれている。尚、同じく曲亭馬琴著の『皿々郷談』（十八錢）、『伊勢松

坂扇屋怪談』（十三錢）は隣のページの「人情小説」に入っている。

二点、三点目は、巻末の小説類（P．64－65）の項目にある。このページは巻末の見開き一ページである。ここには二種類の八犬伝が記載されている。書題は『南總里見八犬傳』帙入全八冊、二圓のものと、金字入四六版全一冊、四十錢の二種類である。

曲亭馬琴著　帙入
○南總里見八犬傳　全八冊　●二圓
金字入
全二冊　●一圓三十錢

これまでと異なり、波線の枠に四隅にリボンのような図案が描かれているだけではない。波線の枠の内側に、太い枠線があり、さらに、各書題の間には、波状の線が引かれている。

これまでのページと比べ、値段も一圓以上が多く、格段に高いといえる。「金字入」や「帙入」と書かれており、どうやら巻末ページに示されている書籍は、豪華版であろうことが推測される。ここに載せられているのは、9タイトル13点。そのうち、7点に「金字入」と書かれている。先に示した『南總里見八犬傳』以外の書題等を列挙すると、次の通り。

『重修眞書太閤記』（金字入大本／全一冊　一圓四十錢）
『繪本太閤記』（元版／全三冊　一圓）
『繪本大岡政談大全』（四六版金字入／全一冊　六十六錢）
『元版　通俗繪本三國志』
（菊判／全四冊　一圓五十錢／金字入四六版／全一冊　四十錢）
『訂正繪本太平記』
（菊判／全三冊　一圓十錢／仝金字入洋製／全一冊　一圓十錢）
『繪本眞田三代記』（菊判／金字入全一冊　七十錢）
『繪入平假名　通俗日本外史』
（菊判／全三冊　九十錢／金字入製／全一冊　一圓）
『新撰近世外史』（訂正中）

この巻末豪華版のページに『八犬伝』と共に載せられている書籍が、全て日本の歴史読み物であることは興味深い。当時、『八犬伝』もそのうちの一つと捉えられていたようである。

片岡貢は「實錄文學管見―歴史と文學の結びつきを中心に―」の中で、歴史文學について、馬琴作品から始まり、明治には美妙、紅葉、露伴ら、大正では鷗外、菊池寛、芥川龍之介らが「凡てこれ一様に歴史小説の中に入れられてゐる」と述べている[20]。これを受け、青木稔弥は「『八犬伝』と近代」の中で、「歴史小説の可能性というのは十分視野に入りうる事柄だろう。」と述べている[21]。

片岡の評論が書かれたのは、一九三六（昭和一一）年頃であるが、この『剏出版圖書目錄』を見る限りは、推定で発行年が一九一〇（明

治四三）年以降の本目録でも、どうやら「歴史文學」扱いをされていた様子が確認できる。

次に大川屋書店の『八犬伝』について考察していきたい。本目録記載の八犬伝は、以下の三種類であった。

・『南總里見八犬傳』一冊物　三十錢
・『南總里見八犬傳』金字入四六版全二冊　一圓三十錢
・『南總里見八犬傳』帙入全八冊　二圓

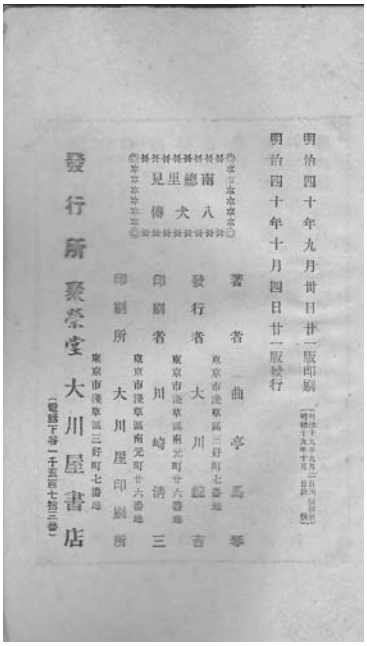
大川屋書店の資料は散逸してしまっているものがほとんどであるが、架蔵本三点と比較して見たい。架蔵本の中、一点目、二点目は拙論にて紹介済みのものである。

・『南總里見八犬傳』菊判版一冊物　金額未記載
一八九三（明治二六）年十月初版、一九〇三（明治三六）年九月十版の貸本屋本。表紙が改装されているが、恐らく書名は『南總里見八犬傳』。値段は書かれていないが、巻末広告が大体一二〜三四錢で、二四錢が多い。
・『南總里見八犬傳』袖珍版一冊物　貳拾五錢
一九一一（明治四四）年八月発行。菊判本の後印本。
・『南總里見八犬傳』菊判全八冊　金額未記載
一八八六（明治一九）年九月二日出版御届、同年十月出版、一九〇七（明治四十）年十月廿一版

架蔵本を見てみると、菊判一冊物は明治三六年で既に十版出ており、さらに一九一一（明治四四）年には後印本に当たる袖珍本まで発行されている。全八冊の方も、一九〇七（明治四十）年には廿一版も発行されている。こうして見てみると、明治十年後半から明治末年までを通して、大川屋書店の八犬伝は人気が高かったことが分かる。さらに菊判一冊物が貸本であり、大川屋が貸本屋であったことを踏まえれば、明治時代を通して多くの人々に読まれたことが考えられるのである。

さて、架蔵本の中でも、三点目の一九〇七（明治四十）年発行の菊判八冊物について詳しく見ていきたい。この『大川屋出版圖書目錄』は一九一一（明治四四）年以降発行であると推定したが、一九〇七（明治四十）年発行のため、一番近い時期のものといえる。

『南總里見八犬傳』奥付（明治四十年十月廿一版）


明治四十年九月廿日廿一版印刷
明治四十年十月四日廿一版發行
著者　曲亭馬琴
發行者　東京市淺草區三好町七番地　大川鎰吉
印刷者　東京市淺草區南元町廿六番地　川崎清三
印刷所　東京市淺草區三好町七番地　大川屋印刷所
發行所　東京市淺草區南元町廿六番地　大川屋書店
南總里見八犬傳

実際に架蔵本の巻末広告を見てみると、そこに記載されている書物と『大阪出版圖書目錄』巻末のページに記載の書物には酷似している。よって、両者はかなり近い時期に発行されたと考えられる。

『大阪出版圖書目錄』の目録と比較して、まず注目したいのは、『新撰近世外史』がどちらも訂正中であるということである。目録の方は「訂正中」であり、架蔵本の方は「訂正近刻」となっている。さらに、載せられている資料名、冊数、金額はその大半が一致している。

『南總里見八犬傳』巻末広告

東陽大概之部
訓蒙日本外史 帙入全 七冊 郵税共▲一圓
大概東陽先生訓解
啓蒙國史略 洋綴全三冊 郵税共▲四十錢
青木東江著
繪入平假名通俗日本外史 全三冊 郵税共▲九十錢
青木東江著
新撰近世外史訂正近刻
訂正繪本太平記 全三冊 郵税共▲一圓十錢
重修眞書太閤記 金文字入大本全一冊 郵税共▲一圓四十錢
繪本太閤記 全三冊 郵税共▲一圓
繪本眞田三代記 全二冊 郵税共▲七十錢
通俗繪本三國志 全四冊 郵税共▲一圓五十錢
曲亭馬琴著
南總里見八犬傳 帙入全 八冊 郵税共▲二圓五十錢

『大阪出版圖書目錄』の中、架蔵本の巻末広告と一致している部分を**太字**で示せば次のようである。

『大阪出版圖書目錄』巻末ページ

○**『重修眞書太閤記』（金字入大本／全一冊　一圓四十錢）**
○**『繪本太閤記』**（元版／**全三冊　一圓**）
○『繪本大岡政談大全』（四六版金字入／全一冊　六十六錢）
○**曲亭馬琴著『南總里見八犬傳』（帙入／全八冊**　二圓／金字入／全二冊　一圓三十錢）
○『元版　**通俗繪本三國志**』
（菊判／**全四冊　一圓五十錢**／金字入四六版／全一冊　四十錢）
○**『訂正繪本太平記』**
（菊判／**全三冊　一圓十錢**／仝金字入洋製／全一冊　一圓十錢）
○**『繪本眞田三代記』**（菊判／金字入全一冊　**七十錢**）
○**『繪入平假名　通俗日本外史』**
（菊判／**全三冊　九十錢**／金字入製／全一冊　一圓）
○**『新撰近世外史』（訂正中）**

全9タイトルの中、8タイトルが一致している。『繪本大岡政談大全』が載せられていないだけである。訂正中であることなど、類似点が多くあるということは、発行年が非常に近いであろうことが推測される。

恐らく、『大阪出版圖書目錄』が発行された時期は、架蔵本が発行さ

れた一九〇七（明治四十）年からそう遠くない頃、目録の一番早い推定時期である一九一〇（明治四三）年にかなり近い時期であると考えられる。また、架蔵本の巻末広告が目録の巻末ページと大半が重なるため、豪華本であったと指摘できる。

『南總里見八犬傳』に関して言えば、帙入り全八冊のみが載せられており、金額が目録では「二圓」だが、架蔵本では、「郵税共二圓五十錢」となっている。架蔵本は全て「郵税共」の金額であるが、目録の「御註文規定」には運送費欄があり、それぞれ値段が書かれている。価格は同じものの、送料分については異なっている点である。内地の場合、目方が二百目迄なら拾錢、四百目迄は拾五錢、六百目迄は貳拾錢と偶数ごとに五錢ずつ上がっていき、一貫五百目迄で五拾錢である。

『南總里見八犬傳』のみ金額が違うが、送料を鑑みれば、同じ書籍である可能性もある。（帙入全八冊の豪華版であることを考えると、送料は五十錢程度かかったかもしれない。帙はないものの、冊数だけの重量を測ってみると、二ｋｇ程度ある[22]）。実際に架蔵本は帙入りではないものの、色刷りの美麗な装丁である。価格は違うものの、同じ書籍である可能性も否定できない。

ここまでを整理すると、大川屋書店の『八犬伝』は、一冊物（菊判版、袖珍版）、二冊、八冊（豪華版）が出ていたことが確認される。随分と種類が出されていたことが伺える。そうして明治を通して多くの発行部数があることも確認できる。

架蔵本『南總里見八犬傳』（八冊）は価格が随分と高いのにも関わらず、一九〇七（明治四十）年の時点で廿一版も出ている。この『大日本出版圖書目録』の巻末ページの豪華本は、大変人気があったのではないだろうか。歴史文學の愛蔵版として発行され、好評を得ていた可能性がある。

高木元は「八犬伝もの銅版絵本二種―解題と翻刻―」の中で、「…この八犬伝に関する出版が活況を呈する事態は明治期に入ってからも同様であり、多種多様な翻刻や抄録等が出された」ことを述べている[23]。

大川屋書店の『八犬伝』を調査してみても、明治時代を通して『八犬伝』が人気であったことが伺える結果となった。文学史上では近代になり、坪内逍遥『小説神髄』によって、あたかも勧善懲悪思想の『八犬伝』は駆逐されたかのようなストーリーとなっている。

しかし、青木稔弥によれば、坪内逍遥の『小説神髄』の影響はさほどではなかったようである。青木は「『八犬伝』と近代」の中で、「柳田泉による逍遥直話によれば、『小説神髄』の初版の発行部数は「二百部内外」（『小説神髄』研究』一九六六（昭和四一）年一一月三十日）であったらしい」こと、「また、再版以降も、さほど売れたとは思えない」ことを指摘している[24]。

さらに、一九二六（大正一五）年二月発行の『小説神髄』（明治文学名著全集第三篇）の宣伝文（「「坪内逍遥論」特集」早稲田文学第二百四十四号、同年五月一日の中折広告）に「永らく絶版となり、これを求むるも容易に得難き貴重なる文献」であると書かれていることを挙げ、「名のみは有名だが、実際には、広い範囲で読まれた書物で

はないというのが真相なのだろう」と述べている[25]。

一八八七（明治二十）年以前の馬琴受容については、「馬琴研究の黎明期」の中で、その参考文献の数から『小説神髄』とは別の次元で、馬琴は、翳りはあるものの、安定した根強い人気を有していた。少くとも、この時点では、『小説神髄』の影響は些少であったと考えてよい」ことも報告している[26]。

知識階級層にもあまり影響を及ぼしていないのであれば、講談本を多く取り扱っている、大川屋のような一般大衆向けの書籍は尚更、その影響は及びようがないであろう。大川屋書店に関しては、先ほど述べたように、明治末年においても『八犬伝』の人気が伺える。

しかし、そもそも大川屋を一般大衆向けと安易に決めつけはできないようである。小田光男は「講談本と近世出版流通システム」の中で、当初『当世書生気質』の第一号が「当時続々と創業された近代出版社のひとつ」であろう、晩青堂から一八八五（明治一八）年六月に発行されたものの、一八八七（明治二十）年には、晩青堂が紙型を手離し、共和堂か大川屋に出版権が移ったことを紹介している[27]。

つまり、一八八七（明治二十）年頃にあって、「近代書店はほとんど整備されておらず、誕生したばかりの近代文学も大川屋を取次とする貸本屋や絵草紙屋といった近世出版流通システムによって読者と出会うしかなかった」のだという[28]。

そして、「公式の出版史には語られていないが、大川屋のような近世出版流通システムに基づく書店だけでない販売活動が、明治後半になって成立する読書社会の底辺を支えていたにちがいない。」ことを述べている[29]。以上より、『八犬伝』は文学史上のストーリーとは別に、近代以降も多く読まれていたことが伺える。

大川屋書店については、小川菊松が『出版興亡五十年』の中で次のように回想している[30]。

> 私が親しく思い出すのは、浅草蔵前にある大川屋書店大川錠吉氏のことである。明治時代古くからの純然たる赤本屋で、「岩見重太郎」、「幡随院長兵衛」などの講談本や、黒岩涙香の「玉手箱」などを何百種も発行していた。私が大洋堂に丁稚奉公に入った二、三日目から、この大川屋に毎日箱車を挽いて、この講談本を仕入に行かせられたものであるから、私にとっては一層感慨が深い。この大川屋は全国の貸本屋や絵草紙屋等が華客で、地方からの注文も、一冊々々の書名を注文するのでなく、仇討物何種何冊とか、侠客もの何種何冊とかいう注文が多かったから、取揃えて刷っておくにも楽だったそうである。

小田光男によれば、この回想は一八九七（明治三十）年頃のことであり、小川菊松が入った大洋堂は書店と貸本屋取次を兼ねていたという[31]。小川菊松にある通り、実際に『大日本出版圖書目錄』には、「涙香小説」や「講談小説」、「講談百種」の項目があった。大川屋も貸本屋であるが、全国の貸本屋が取引先であるのだから、当然なが

ら、その影響力は非常に大きいといえるだろう。

けれども、この大川屋の隆盛は続かなかったようである。小田光男は前出の「講談本と近世出版流通システム」の中で、「…近世出版流通システムによる講談本の全盛は明治後半であり、大正に入ると状況が変わっていたようだ。」と指摘(32)。

その理由について、「貸本屋の衰退と講談社や博文館の参入に起因し、生産と流通と販売が近代出版流通システムに取って代わられたことに起因しているのではないだろうか。」と考察している(33)。続けて小田は「すでに昭和の初期において、講談本などの収集が散逸のために困難になっているという実態」について触れている(34)。

こういった状況を鑑みても、この『大阪出版圖書目錄』は明治末年に非常に近い時期のものだと考えらえる。その当時の大川屋を知ることのできる貴重な資料であることは間違いない。

さらに小田は、「おそらく現在ではそれらの収集はまったく不可能であろう。大川屋の全出版物は明らかにされていないと思われる。」と述べ、「もし早いうちに大川屋の出版物の収集と研究がなされていれば、出版史や読書史や文学史も異なる視点を導入できたかもしれないのだ。」と語っている(35)。

しかし幸運にも、布川角左衛門氏の長年の労力のお陰で、散逸せずに『大阪出版圖書目錄』は残っていた。そのために、大川屋の全出版物が載せられていて、その内容が垣間見ることが可能な本目録を紹介するに至れたのである。

五、結語

本稿では、当時の大川屋書店の出版物の全体像、及び大川屋の実情を知ることができる、現在において唯一の貴重な資料である『大阪出版圖書目錄』の紹介、考察を行った。資料が散逸してしまっている中で、本目録の紹介により、幾らかの実証研究が出来たと思う。

そして「八犬伝」受容史からの側面ということで、現在残されている何点かの資料との比較をも通して、大川屋の「八犬伝」に焦点を当てて考察してきた。それによって、明治期を通して、「八犬伝」は依然として人気であったといえることを確認することができた。

本稿で紹介した以外にも、『大阪出版圖書目錄』には多くの書籍が載せられている。例を挙げれば、圖書類には、日本外史、地理、理科、訴訟法、民法の他、家庭實典や剣柔術指南、裁縫婚礼等もある。少年美談、立志美談等の少年向けの読み物の類もある。それらは明治期の読書環境や文化を知ることができる貴重な情報である。

本稿では貴重な資料であるこの一冊の目録、『大阪出版圖書目錄』から、一体どこまで垣間見られるかということを、大川屋書店、布川文庫、「八犬伝」という三つの切り口から紹介、考察を行った。

今後の課題としては、「八犬伝」受容史の側面から言えば、「歴史文學」としての受容に関しては、他の書籍についても検証をし、積み重ねていく必要がある。大川屋については、少ない資料ながらにできる限りの収集と紹介を試みてきたが、今後も可能な限り、収集、紹介していきたいと思う。

注

（1）『副大出版圖書目錄』は、東京本館にある人文総合情報室の書庫内資料。閲覧は許可制である。

（2）吉沢英明「「講談資料」―尋ね求めて三〇年」（『日本古書通信』60巻5号、一九九五年五月、一一～一三頁）

（3）小田光男「講談本と近世出版流通システム」（『古本探求』、論創社、二〇〇九年二月、一二五～一三三頁）

その他、「出版・読書メモランダム　出版と近代出版文化史をめぐるブログ」にも幾つか大川屋書店に関する論考がある。[http://odamitsuo.hatenablog.com/]（最終検索日：二〇一八年十月二七日）

（4）㈠ 山本貴恵【資料紹介】大川屋書店版『里見八犬傳』略解題」（『研究と資料』第六十九輯、研究と資料の会、二〇一三年七月、三九～四二頁）及び、

㈡ 山本貴恵【資料紹介】袖珍本『南總里見八犬傳』略解題」（『研究と資料』第七十九輯、研究と資料の会、二〇一八年七月、四三～四八頁）

（5）前掲注（4）の㈡、四三頁）

（6）八木敏夫編『全国出版物卸商業協同組合　三十年の歩み』全国出版物卸商業協同組合、一九八一年六月、三七頁

（7）前掲注（4）の㈠、三九～四二頁）

（8）前掲注（4）の㈡、四七頁

（9）前掲注（4）の㈡、四三～四八頁）

（10）㈠ リサーチ・ナビ　国立国会図書館「布川文庫」この他、「布川文庫」について書かれた資料として以下がある。

㈡「特別コレクション「布川文庫」について」（『国立国会図書館月報』521号、二〇〇四年八月、一八頁）

㈢「布川文庫」（国立国会図書館百科編集委員会編『国立国会図書館百科』、出版ニュース社、一九八八年一二月、三八一頁）。

（11）柴野京子「出版資料としての布川文庫」（『参考書誌研究』78号、二〇一六年一二月、一六九～一七八頁

（12）大久保久雄「「布川文庫」について―近代出版研究資料の宝庫―」『印刷界』240号、一九七三年一一月、四六～四八頁

（13）小林恒也『出版のこころ―布川角左衛門の遺業』展望社、二〇一一年一月。他、布川氏については、日本出版学会「布川角左衛門事典」編集委員会 編『布川角左衛門事典』「布川角左衛門事典」刊行会、一九九八年一月がある。

（14）前掲注（13）、八～一一頁

（15）布川角左衛門「「布川文庫」の始末記」（『国立国会図書館月報』324号、一九八八年三月、二三～二四頁

この他に布川角左衛門自身によって書かれたものとして、「「布川文庫」のこと」（『日本古書通信』50巻5号、一九八五年五月、四～五頁）、「私の生涯と布川文庫」（『こどもとしょかん』67号、一九九五年十月、一頁）がある。

（16）前掲注（11）、一七〇頁

（17）前掲注（10）の㈡、一八頁）

（18）前掲注（15）、二四～二五頁

（19）　前掲注（15）、二五頁
（20）　片岡貢「實録文學管見―歴史と文學の結びつきを中心に―」（文芸懇話会編『文芸懇話会』1巻10号、一九三六年十月、一二～一三頁）
（21）　青木稔弥『『八犬伝』と近代」（『讀本研究 第七輯上套』、渓水社、一九九三年九月、一〇五頁）
（22）　明治時代の一貫は3.75kg。
（23）　高木元「八犬伝もの銅版絵本二種―解題と翻刻―」（「人文研究」第33号、千葉大学文学部、二〇〇四年三月、六一頁）
　高木元はその根拠として、注記に以下の参考文献を挙げている。『国立国会図書館所蔵明治期刊行図書目録（語学・文学の部）』第四巻（一九七三年、国会図書館）、青木稔弥「曲亭馬琴テキスト目録　明治編」（『読本研究文献目録』、一九九三年、渓水社）。
　その他、青木稔弥の論文が参考になると述べている。
（24）　前掲注（21）、九二頁
（25）　前掲注（21）、九二頁
（26）　青木稔弥「馬琴研究の黎明期」（『讀本研究 第四輯下套』、渓水社、一九九〇年六月、二一二頁）
（27）　前掲注（3）、一三〇～一三一頁。）
（28）　前掲注（3）、一三一頁
（29）　前掲注（3）、一二九頁
（30）　小川菊松「赤本出版の老舗大川屋～附、貸本業と雑誌回覧業の回想」（『出版興亡五十年』一九五三年八月、一八四頁）
（31）　注（3）、一二九頁
（32）　注（3）、一三一頁
（33）　注（3）、一三一頁
（34）　注（3）、一三三頁
（35）　注（3）、一三三頁

付記　引用の際、ルビは適宜省略した。圏点はすべて原文のままである。傍線、[…]（省略）、[／]はすべて引用者の補足による。[／]は改行を表す。尚、引用の際にできる限り旧字体のまま引用した。

『副大出版圖書目錄』（書庫内資料）閲覧に際して、国立国会図書館人文総合情報室の方々にお世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。